

ホトトギス

四月号



一枚のファックスより 稲畑汀子

帰って来ると私は何時ものように書斎のファックスを見る。ホトトギス社からの校正の何枚かに混じって朝日俳壇の内藤さんからのメッセージがあった。

「夢ならぬ、貴重なお時間を食う猿のようなお願いで恐縮ですが、ぜひ、前向きに……」検討下さいませようお願いします……」という書き出しである。明日一番の飛行機で上京して朝日新聞社へ伺つのに何だろうと思わず読み続けた。

「……社では『子ども記者』を募り、彼らの取材による『子ども新聞』というページを、年、1、2回掲載しています(次回は2003年1月9日付の予定)。今年の子ども記者(小学4年から中学2年)を募集したところ、中に俳句好きが何人かいて、ぜひ、有名俳人に俳句についてインタビュー、写真を撮り、記事に仕立てたいと希望しているそうです。

彼等の世話をする松村宗夫編集委員という人物が、是非『正統派』の稲畑先生(お一人)をお願いしたいと申し出ております。

具体的には、10月後半の土曜日か日曜日(平日は子ども記者の学校があるので)に東京(芝公園)でもどこでも一時間ほどご都合をつけていただけないでしょうか? インタビューにうかがつのは子ども記者2、3人と付添いの松村編集委員の予定です。俳句の将来のためにも、何とぞよろしくお願いいたします。」

さっそく、スケジュール帳をみると十月、十一月はぎっしり予定が書き込まれてある。

「駄目かなあ……。せっかくいいお話を頂いているのに」

もう一度スケジュール帳を細かく見て見た。十月後半の土、日曜日は何とか無理をしてみようと思ってもホトトギス吟行会の朝早くしか時間が取れないことが分った。でも十一月九日の土曜日だけが東京に滞在しているのに一日空白になっている。でも十月はやはり無理かも知れなかった。

その時、又一枚のファックスが流れて来た。

「先ほどの件、11月はじめの土、日でも結構です。何とぞ何とぞよろしく願いましたします。

お返事は明日、おうかがいいたします。……」

こども記者によるインタビューはすんなり十一月九日の朝十時半からと決まった。前もって担当の松村さんから、茶菓などの気遣いをしないようにとのファックスが入った。

何となく二十年近く毎週通った甲南中学校の特別教育活動の俳句の授業を思い出しながら楽しみになって来た。

立冬を過ぎるまでに今年にははやばやと寒さがやって来た。東京の十一月はもうすっかり冬である。床暖房を入れて部屋を暖かくしてこども記者たちを待つことにした。松村さんから茶菓の用意をしなくてもよいとあらかじめファックスが届いたが、子どもでも喋ると喉が渇くに違いないしお茶を用意した。実際、

ここに住んでいるわけではないのでお菓子は無いが、頂いたチョコレートの残り物が冷蔵庫にあった。中にアーモンドが入っていて美味しいチョコレートであったが、数えたら二十五粒しかなかった。

松村さんのファックスによると「……子ども記者は6年生4人(男女各2人)と5年生1人(男子)計5人です。もちろん、私が同行いたします……」とあったので二枚のお皿にチョコレートを盛った。

お昼前になるのでお腹が空くに違いないとお煎餅があったのを出して置くことにした。

十時回った頃チャイムが鳴った。

「はあーい。どっぞ」

鍵を開けておいたのでドアが開いた。狭いマンションであるが白と紺の部屋は日頃住んでいないので余り汚れていない。必要なものしか置いていないので何とか見た目には整頓されている。

「こんにちは」

「おじゃまします」

「先生お忙しい中すみません」

すでに朝日俳壇の選句場でお目にかかっていた松村さんの顔が見えた。

「よくらいして下さいました。さあさあ、上がって下さい」

小さい半円形の玄関の土間に大きな靴が溢れた。私の靴はあらかじめ靴箱に仕舞って置いた。

「さあさあ、どっぞ」

いつも山会で使っている大きなテーブルに子ども記者が私を囲むように座ることになった。用意してあったお茶を入れての前に並べた。

「ありがとうございます」

生き生きと、はきはきとした礼儀正しい子どもたちである。大きな鞆を背負ったり手に下げたりして、座るとさっそくノートを出して来た。覗き込むと綺麗な字でぎっしり鉛筆の文字が何枚も書き込まれてある。

「わあー、皆さんしっかり勉強してきたんですね」

五人とも明るく賢そうな眼差しを一斉に私へ投げかけていた。

「じゃあ、ここで自己紹介をしましょうか」

松村さんが声をかけてくれた。

「川崎市の國宗めぐみです。めぐみは愛と書きます」

「目がぱっちり可愛い。」

「東京都の篠田さえです。冴と書きます」

「はきはきと話して気持ちがいい。」

「さいたま市の相川れいなです。れいは命令の令、なは奈良の奈です」

「皆、私をはつきり見てにこやかに答える。」

「目黒区の小川泰樹です」

「狛江市の管梓です」

「男の子たちも明るく元気がいい。」

「どんな質問が出て、どのような答えになるか分からないけど、何でも聞いてくださいいね」

何となく楽しくなってきた。

「じゃあ、國宗さんから始めましょう」

「はい。俳句は幾つから始めましたか？」

「皆さんより少し早い年かなあ、十ぐらいいだつたでしようか……」

次々出てくる質問に答えながら、随分しっかりした良い子どもたちがこのように育っているのに瞠目した。

用意したチヨコレートも忽ち無くなって行くのが気持ちよかつた。

「お茶のお代わりは如何？」

「はい、よろしく願います」

「冷たいのがよければありますよ」

「いいえ。それで結構です」

「そつ」

次々質問に答えて行くにつれて打ち解けて行く。

「松村さん、こんなにしっかりした子どもたちがいるなんて日本の未来も安心ですね」

「いい子どもたちでしょう。もういろんな方にインタビューをしてきたのですが、随分しっかり質問するので、実は私もびっくりしているのです」

五人の質問が終わると、私に色紙を出してきて、子どもたちにメッセージを書いて欲しいと言つた。

「俳句でもいいかしら」

「勿論です」

そつ言ったものの、何を書くか心づもりをしていなかったの

ではたと困つた。外は小春日和だからその季題を使おうと決まつただけで、色紙を手にして筆ペンを持つたまましばらくじつと考へた。五人の子どもたちは靴からカメラを出して来て、全員が私の手もとに焦点を合せている。

質問に……と先ず書いた。ばしゃばしゃばしゃ、とシャツターの音が一齐に鳴つた。次が出てこない。困つたと思つたとき、子どもたちのきらきら光っていた目が頭に浮かび、明るき未来……と書いた。そうなるかとは、小六月、と下五字が来る。

質問に明るき未来小六月 汀子

と書いてほつとした。皆が作つて来た俳句を選んで、今日のインタビューは終りである。

「これから、皆さんはどうされますか？」

「社に帰つて編集会議を致します」

と松村さんが言われたのを皆がうなずいた。

「今の子どもたちは結構本も読んでいるのですよ」と言われたのが印象に残つた。

「ありがとうございます」

「とても楽しいでしたよ。みなさんこれからも俳句を作つて下さいね」

「はい」

大きな靴が出て行つた後、三つ残つたチヨコレートの一つを口に入れながら、私はしばらく余韻を楽しんでいた。

旬日記

汀子

平成十四年四月一日 ロイヤル俳壇
 咲き急ぐ花あるがまま旅予定
 百千鳥庭に咲くもの離しけり
 変へらの花の期待は捨てられず
 み吉野の日の期待は捨てられず
 のどけしや家居といふも小半日
 四月三日 祝「火居」六百五十号
 手作りの祝ぎの座春の花溢れ
 一と夜さに春の落葉の埋む庭れ
 記念樹の桂若葉となりそよぐ
 四月六日 菅原ホトギス会
 たちまちに過去を臚としたる日々
 初花と思ふ間もぬく散りそめし
 咲く遅速間もぬく桜祭かな
 四月七日 関野分会
 親猫の子猫見守る間の距離
 あなどれぬ子猫の爪と知つてをり
 み吉野の花の消息胸に秘め
 四月七日 下萌句会
 ここまで花の喧騒届かざる
 散る花を愛づるもさくらまつりかな
 み吉野の花の期待をつなぎたく
 四月八日 虚子忌
 さへつりの中に思こころ深めけり
 あたたかき虚子の心を知る忌日
 四月九日 大阪倶楽部
 咲き終りても三極の花なりし
 み吉野の春を惜まんはかりごと
 春暁や予定通りに旅終りへり
 咲き増ゆる狭庭の春を惜みけり
 四月九日 続養倶楽部
 旅帰りの日永の稿を書き継ぎて
 虚子忌への旅の余韻を引く日かな
 み吉野の日永の旅を楽ししまむ

怪我のこと知りぬ日永の消息に
 四月十一日 清交社
 寿福寺の参道長し萩若葉
 隣より声のつ三羽百千鳥
 紛れなき声の二つ灰神楽花
 焼べ足して舞せつて崩れ花
 薪の香を立たせて若葉かな
 まだ風の素通り萩の若葉ならめ
 四月十日 丁業倶楽部
 麗かやあるがままなる旅路とは
 初桜たちまち散るを誘ふ潮風
 初花と聞くも旅程の変へられず
 四月十三日 吉野山くつぎの会
 吉野山花ある如くなき如く
 桜野吉野の山路行く限り
 み吉野の花なき旅もよき仲間
 この宿を踏みて盛りの吉野恋餅
 み吉野のいつくより花散りくるよ
 皆怖くなりて返しぬ春の闇
 星を見に出し春宵の五六人
 闇深き山路といふは人臚
 春宵の話ふ見ぬといふ影臚
 見しといふ見ぬといふ影臚
 四月十四日 第二句会
 よへの怪確かめに行く春山路
 杉間浅る朝日下り来し残かな
 案外に残花の山路なりしかな
 残花浴び吉野の金の由来聞
 四月十六日 有恒倶楽部
 皆庭に出た花屑を踏む別れ
 峽宿に残花に鳴く日和かな
 鶯の平凡に鳴く日和かな

りらの門開け放ちおく庭手入
 みよし野の旅語らば花は葉に
 咲き急ぐ庭惜春の集力
 記念樹の桂若葉でなし春落葉
 結界のあるやうでなし春落葉
 杜ユリッもつとも雨に乱れけり
 四月十六日 無名会
 風光くむ湯呑の由へ旅二日間
 新茶くむ湯呑の由へ旅二日間
 咲き終るものを散らして春の雨
 春惜む心に雨の上りけり
 牡丹の香りに侍りをりにけり
 雨上りの待ちま風光の光る庭
 四月十七日 夏潮句会
 みよし野の旅象て春の深まりぬ
 散り込みし旅象の遅速いふ勿れ
 みよし野の桜の遅速いふ勿れ
 雨降つて止み降つて止み春深し
 話題にも祝り尽したる桜かな
 四月二十一日 浅井博志様御結婚
 これよりは二人のため柏餅
 四月二十六日 時雨会
 仕残せし仕事忘れて旅暮春
 すれ違ふ赤きは外車葱坊主
 子猫は野良となりたる眼を坊主
 奥の席より占められたるゆく暮春
 四月二十七日 句会と講演の会
 塩抜きも味つけも上海雲かな
 塩抜きも味つけも上海雲かな
 雨の日は雨の巣作りとて燕
 始まらば燕の巣作りとて燕
 四月二十八日 野分会
 春愁や書かねばならぬ稿置きて
 春愁や思ひ寝不足とも思ふ
 春愁や思ひ寝不足とも思ふ
 手の上に乗せて爪の待つてをり
 春愁や思ひ寝不足とも思ふ
 手の上に乗せて爪の待つてをり
 春愁や思ひ寝不足とも思ふ
 手の上に乗せて爪の待つてをり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十四年四月四日 蕉心会
 川を見 四月八日 忌も近
 又も飲む 復活祭の真つ昼
 忌に集ふ日 近づく花は葉
 春の空 下町 変りゆく 早
 妻を 超す 吾娘の 背丈や 学
 平日の 長閑 過ぎたる 都心か
 春風 に 取舵 重く 水尾 歪む
 都心 には いろんな 音が あり 日
 春の 川 少し 怒つて みる やう
 四月六日 日本伝統俳句協会関東支部大会
 残花 あり 落つ 一片 といふ
 数多 あり 落花 する もの 耐へる も
 風の 修羅 落花 する もの 耐へる も
 四月七日 - 悠五周年祝句
 この 祝ぎを 確と 見つめる 残花 かな
 四月八日 虚子忌
 影に 入る より 春風 と 忌心 と
 四月十一日 土筆会
 麗人や 山葵 効き 過ぎ たる 顔
 江戸前 と 山葵 の 効いて きたる 黙
 脳天に 山葵 の 効く 旅 きたる 黙
 四月十三日 吉野くつろぎの旅
 何となく 吉野の 花 であり けり
 初蝶 は シテ の 舞花 ツレ の
 登る 人 諦め の 花 人 花 の
 若女 将吉野 の 花 と なる 今
 神隠し に 遇ひ し 吉野 の 花 なる
 葉桜 も 杉も 魂宿す 刻

鶯の 声に 霊気 を 解く
 鶯の 影や つばに あり 我は 石だ 山
 残花 今 ちりぬる を 我が 帰心 持て
 来年の 花時 と いふ 思案 かな
 花人 を 集め 西行 庵の 寂
 四月十六日 草木瓜会
 行春 や み奥の 白解 けゆ
 行春 や 奥の 千本の 心置 け
 水芭蕉 沼暮れ 残る 一と ころ
 水芭蕉 白銀の 野を 引き 継ぎ
 筍て ふ 稲城の 味を 賜り ぬ
 四月十九日 三番町句会
 臙影 後 醍醐 帝は 北を 向
 花の 精なる 寺魅 鎮め 花は 葉
 如意 輪なる 寺魅 鎮め 花は 葉
 四月二十日 登高会吟行会
 朝霞 富士 どのの 辺り 自然 水
 都心 により 一歩 の 自然 水
 鼻先 につく 古墳 は 触れ つけ 犬散
 亀鳴く や 古墳 は 触れ つけ 犬散
 黒々と 蛙に なる 日待 てる 古
 明治の 世知ら ぬ 新緑 知る 古
 四月二十三日 若水会
 鳥の 巢に 枝は 力を 抜いて へり
 永き 日や 桜は 前線 なほ 北
 鳥の 巢を 要と したる 大樹 かな
 電球の 次々 に 切れたる 日永 かな
 永き 日や 吉野 魑魅を 蔵し かな
 暮か ぬる オペラ 跳ね たる ロビー かな
 四月二十六日 時雨会
 暮の 春嫁 てる 心葉 嫌ふ 妻

雑詠 汀子選

亡き妻の部屋寒月の射すばかり
神 戸 牧野耕二

過去帳に妻の名しるす霜夜かな
同 同

昨日見し甲句また読む冬日向
福 岡 松尾緑富

今一度大原の紅葉訪ひたしと
同 同

及びたる話京都の紅葉見
同 同

祇王寺と聞けば紅葉のその頃を
神 戸 後藤比奈夫

干柿が好き太陽が好きなりし
同 同

咳止めと鱸酒いづれすすむべき
同 同

来年は頼めさうなる新暦
同 同

大勢と居ても本堂うそ寒し
新 潟 安原 葉

虚子句碑はここぞと小鳥来てをりし
同 同

山眠る噴火の怖ささらしつ
同 同

気がつきし時は過ぎをり一の西
東 京 今井千鶴子

世田谷の八幡宮を発ちし神
同 同

かまど神道祖神など留守を守る
同 同

文化の日歴史を秘めし二条城
同 同

北山に日矢射す京の初時雨
同 同

炉開や灰白々と現れし
同 同

めづらしや湖の晴れ来し西虚子忌
鹿 野 浅井青陽子

秋深し横川詣のいく度ぞ
同 同

忌心に僧を待ちぬし温め酒
同 同

国生みの島へ流星矢継ぎ早
徳 島 上崎暮潮

灯に燃ゆる新町川や阿波踊
同 同

手に載せるほどの秋風とぎに来る
同 同

適塾は明治のまゝの小春かな
豊 中 滝 青佳

鴻池新田会所菊の鉢
同 同

もののふを鎮めし障子明りと
同 同

初霜を当てし甘味と諾ひぬ
神 戸 山田弘子

紅葉散る風の華やぎはじまりぬ
同 同

散紅葉踏みし靴みな戻り来し
同 同

妻心臓発作の冬の刻々に
京 都 粟津松彩子

風音の中に短日ありにけり
同 同

天帝は足早ならん神の旅
同 同

立ち上がる冬溝道に仁王立ち
北 見 猪子青芽

立ち上がる冬溝足のある如く
同 同

立ち上がりたる冬溝に月丸く
同 同

冬日射部屋に溢れてケアハウス
姫 路 桑田青虎

窓にくる鳩をまつ日々冬ぬくし
同 同

クリスマスイヴに届きし訃報あり
同 同

高原の潤む半月芒濡れ
同 同

確かなる蓑虫庵の秋の声
同 同

この宮もすでお発ちか神無月
同 同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

雑詠句評（三月号より）

出来秋を車窓に虚子の懐へ 東京 稲畑廣太郎

「出来秋」とは五穀、特に稲のよく出来た秋をいう。当節は米離れの世とはいえやはり米は日本人の主食であって、豊かに稔った稲田の続く景色は嬉しいものである。

瑞穂国とは日本の美称でもあるが、その出来秋は殊に美しい。黄金色の景に満ち足りつつ「虚子の懐へ」とは、西の虚子忌へ行かれたのであろうか。十月十四日、比叡山横川の虚子之塔で行われる法要は正に「虚子の懐」である。

大きく明るい自然、出来秋と大きく温かい虚子の懐をさらりと詠われ、旅の心の弾みまで感じられる句である。（美奇）

比叡山横川での西の虚子忌に参列するために新幹線で西下する作者。車窓にはたわなに稔った稲田の黄金の波がうねる。虚子の句はまさに生命の奔めく豊穡の自然への讃歌であったという思いに作者は達着したのではなからうか。横川は確かに虚子の懐と言つてよいが、それに虚子の句業の中核が重ねられ懐と表現されているような気がする。（汀子）

深秋の金鱗湖先づ案内して 福岡 松尾緑富

金鱗湖は大分県にありJR由布院駅から徒歩二十分程のところである。湖底からは温泉が湧出し、寒くなると水面から湯気が立ちのぼる。湖畔には「下ん湯」という共同浴場もある。

この句は恐らく温泉宿（ホテル）も予約済であるが、先ず名勝の金鱗湖に案内して、旅心を解いてゆつたりとして貰つたと云う。情景や雰囲気がよく伝わってくる句である。（忠彦）

大分県別府の奥の由布院温泉の中にある金鱗湖は湖底から温泉が湧いていて寒い朝など湯霧が湧いて幻想的な情景を醸しだしてまことに美しい。遠来の客を誘って湯布院へ行くのに、先ず金鱗湖を見せに案内するのである。ここは作者が昔前主宰の年尾と何度か来た思い出の場所である。懐かしい昔話にも花が咲いたのに違いない。深秋という季節がしみじみとした思いを伝えている。（汀子）（以下略）

若水集

廣太郎選

おでん・枯芝

人情と云ふ重みある串おでん
串おでん馬手弓手にはコップ酒
青空へ諸手を上げて芝枯るる
妻として恋人としておでん食ぶ
おでん屋に浮世の時間忘れけり
おでん屋にさみしがりやの顔並び
ビル谷間おでん屋台のけふの位置
おでんやの夫婦いはくのありさつな
枯芝に猫のロミオとジュリエット
芝枯るゝスキーコースになるために
枯芝の太陽一つ吹かれをり
おでん屋の雲のかけらになる湯気が
屋台透け星澄む路地のおでん酒
呉越とてしばし休戦おでん酒
おでん屋を出れば星降るビル谷間
おでん酒女将にほの字なりし日も
飛火野の起伏のさまに芝枯るる
とこしへの飛火野芝は枯るとも

高知

野村嶺北子

神戸

同

岩見沢

同

小樽

清水里美

東京

同

吹田

同

同

柴尾一浪

同

暮敵とおでんに夫を預け来し
話にも辛子にも泣きおでん酒
人生のおほよそ見えておでん酒
狭さつに食べねばおでん美味くなし
おでん食べれば肩叩き易くなる
赤い灯になつておでんが招きをり
おでん屋のこぼす昔の灯色かな
おでん屋の頭上阪神電車過ぐ
独りでは酔へさつもなきおでんかな
おでん食ぶ眼鏡はつしてはにかみぬ
芝枯れてやつと日の目を見し玩具
浜風を連れておでんの客となる
枯芝を踏む足君に近づけり
枯芝に四本の足投げ出して
枯芝に夕日と君を残したる
暫くはおでんの中は閑ヶ原
蓋とればおでんへ槍の勢揃ひ
枯芝へ機上より来る大統領
家族留守中継さかなにおでん酒
枯芝にテスト結果を語る午后
枯芝に大の字に寝て吾が天下
枯芝を乾かしきれず日の落ちし
咲き残るもの枯芝の端に伏し
かの駅のかの夜の縁おでん酒

茨木

大野伊都子

神戸

同

神戸

同

三重

同

長野

同

名古屋

同

松戸

同

長岡

同

同

石田遊水

若水集句評

廣 太 郎

青空へ諸手を上げて芝枯るる 高知 野村嶺北子

一般的には「枯」という文字はどちらかというとながていな印象があるが、こちらには「青空へ諸手を上げて」と季節の姿を却って活き活きと描いている。「芝枯るる」事を生命感溢れる姿に捉えたところが秀逸である。

おでん屋にさみしがりやの顔並び 神戸 藤野佳津子

東京では、何十年と続く老舗や、屋台など「おでん屋」は数多あるが、結構値段も手頃でサラリーマンの憩いの場所だと聞く。浮世の憂さを解く、それこそ「さみしがりやの顔」がしみじみとこの句から見えてくる。すつきりとした表現が季節を引き立てている。

枯芝に猫のロミオとジュリエット 青見沢 清水里美

別に物語のように禁断の恋ではないだろうが、「枯芝」の上で猫のカップルが、筆者にとっては何ともつらやましいひとときを過ごしているのだろう。日向であれば結構暖かい場

所であり、猫にとつては恰好のデートコースなのではないだろうか。季節を通してロマンチックな佇まいが感じられる。

呉越とてしばし休戦おでん酒 東京 寺出訓三

商売敵、句敵、いろいろ想像出来るが、「おでん」を前にして文字通り「呉越同舟」なのである。美味しいものを前にしては、人間とても争っている事などは絶対に出来ない、というのは古今言われてきた、かどうかは判らないが、筆者は固くそう信じている。季節がこの上もなく美味しそうに表現されている。

とこしへの飛火野芝は枯るるとも 吹田 柴尾一浪

歴史の舞台としても有名な奈良の「飛火野」。この由緒ある地の佇まいが感じられる。もちろん四季折々の景が美しい場所であるが、「芝は枯るる」時期でもその景は揺るぐ事なく美しさを保っている。季節が重々しく目の前に迫ってくる。

(以下略)